

イザヤ書28章16節 「シオンに据えた礎の石」

1A 身に短すぎる寝床 19

1B 豊かさ 1-5

2B 御言葉へのあざけり 7-13

3B 世との契約 14-19

2A シオンに据えられた石 16

1B 試みを経た石

2B 尊い石

3B 堅固な石

3A つまずきの石

1B 見捨てられた石

2B 砕く石

本人

イザヤ書 28 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは 26 章まで来ました。午後に、27 勝から 29 章までを読みますが、今朝は 28 章 16 節に注目します。「だから、神である主は、こう仰せられる。「見よ。わたしはシオンに一つの石を礎として据える。これは、試みを経た石、堅く据えられた礎の、尊いかしら石。これを信じる者は、あわてることがない。」

1A 身に短すぎる寝床 19

私たちがイザヤ書を読んでいる中で、本当に時宜にかなっていると思いませんか？アッシリアという脅威があり、しかしある程度の豊かさの中に生きていたユダが、まだその豊かさに頼ったり、武器や水源の確保に走ったりして、そしてエジプトとの軍事同盟によって安全保障に備えました。しかし、キリストのみが拠り頼むことのできる確かな岩なのだ、ということを見ていっていません。私たちの生きている世界が、今、非常に不安になっています。テロリズムが世界に広がっている、経済的な安定の保証はどこにあるのだろうか？また人間関係において、人の心の状態が以前よりもより複雑になりました。そして分断が多くなっていますね、人々の意見が対立し、これまで仲が良かったと思ったら、真つ二つに分かれてしまったという痛みもあります。こうした中で、人間が歴史を通じて通ってきた苦しみも自分に襲いかかります。病に罹ったり、事故があったり、多くの天災に見舞われます。けれども、経済や政治において、これまでの豊かさがあります。だから、それに頼っていれば何とかなる、とってしまうのです。けれども、それがいつ剥がれ落ちてもおかしくない状態にあります。

こうした中で、28 章から 35 章まで改めて、ユダの中にある霊的問題について、神はイザヤを通してメスを入られます。それは、エジプトとの軍事同盟にユダが頼ろうとした、その心の動きに主

が取り組まれます。

1B 豊かさ 1-5

28 章の初めは、北イスラエルの豊かさについて話しています。「1 ああ。エフライムの酔いどれの誇りとする冠、その美しい飾りのしぼんでゆく花。これは、酔いつぶれた者たちの肥えた谷の頂にある。」と言っています。エフライムは豊かな土地で、それゆえ肥えていました。そして、酒に象徴される、自分の利欲に従って生きていた姿を描いています。仕事をして、自分の余暇を楽しんで、自分の業績を積んで、自分の趣味を追及して、自分の、自分の、となっている姿です。それは表向き美しく、その人の人生は豊かだと思わされるものですが、豪雨が降って、あるいは雹が降ればたちまちしおれて、倒れてしまう花のように、大きな試練によってなくなってしまいます。北イスラエルは、紀元前 722 年にアッシリヤによってその首都サマリヤが陥落して、捕え移されました。

2B 御言葉へのあざけり 7-13

このことをイザヤは語っていたのですが、その御言葉を聞いたイスラエルの預言者や祭司たちは、その言葉を聞いて、馬鹿にしていたんですね。なんと、彼ら自身も酔いしれていて、それで次のように言っていました。「28:9-10 彼はだれに知識を教えようとしているのか。だれに啓示を悟らせようとしているのか。乳離れした子にか。乳房を離された子にか。彼は言っている。『戒めに戒め、戒めに戒め、規則に規則、規則に規則、ここに少し、あそこに少し。』と。」イザヤの言葉が、あまりにも単純で、単調で、同じことを繰り返しているではないか、まるで母親が幼子に言葉を教える時のように、と揶揄していたのです。自分たちは、酒によっているという世的になっていたのですが、話していることは知識の上では高度だと思っていたことを話していたのでしょう。イザヤは、「主を信頼しなさい。」としか話していないので、そんな物事単純ではないのだ、現実には複雑で、これこれの知識が必要なのだ、と物事を複雑に考えていたのです。

けれども、イスラエルはアッシリヤに捕え移されます。「そんなに単純なこと、明白なことを聞くのが嫌なのか？ならば、よく分からない言葉でわたしは語ろう。」と言われて、アッシリヤ語を聞かせるようになる、と神は言われます。これは怖いことですね、私たちは心の中で、何か思い煩いが入ってくると、神の声がそのまま入っていかなくなる、それで自分の周りで一体何が起きているのかが分からなくなっていくます。

3B 世との契約 14-19

そして、この北イスラエルの落ち目を見て、南ユダがせせら笑っているんですね。「何をやっているのだろうか？」とあざけています。私たちも、他の人々が行なっている愚かに見えること、それを呆れて、身下しているかもしれないけれども、実は自分たちが行なっていることで大きな問題を抱えていた、ということがあります。「人ふり見て我がふり直せ」という言い回しがありますが、まさにそれです。ユダは、イスラエルがあまりにも世的になっているので、あざけていましたが、彼らこそ主に拠り頼むべきところを、エジプトとの軍事同盟により頼んでいたのです。「アッシリヤのような

にわか雨が降って来ても、私たちのところまで洪水になることはないさ。」と嘯いていました(15節)。そこで、主が、「にわか雨は溢れて、あなたに押し寄せてくる。」と警告されたのです(19節)。

そこで20節を見てください。「寝床は、身を伸ばすには短すぎ、毛布も、身をくるむには狭すぎるようになる。」興味深いですね。これは、自分の身長けよりも短い寝床のことを示しています。毛布も小さすぎます。ちょうど自分が、小さな子どもの掛布団と敷布団だけをあてがわれているような状態です。冬であれば、寒くて寒くて仕方ありません！まさに「お寒い」状態であります。彼らは、今の世にあるもので満足して、安心しようとしていたけれども、そこに安きを得られていない状態、それがこの寝床と毛布の例えなのです。自分は、「これがあるから安心なのだ。」と思っています。けれども、「これだけではだめでしょう。何かは抜けている。」とおおよそ、薄々わかっています。けれども、自分を押さえつけるようにそうした不安は見ないようにします。けれども、どこかで不安なのです。

私たちには、神が啓示されています。示されています。神が必要なことは分かっています。「ローマ 1:19 なぜなら、神について知りうることは、彼らに明らかであるからです。それは神が明らかにされたのです。」神の創造されたものの中に、神の永遠の力が現れているのですが、それを押し殺しています。また悪を行なっていたら、死をもって裁かれなければいけないことも知っています。「1:32 彼らは、そのようなことを行なえば、死罪に当たるという神の定めを知っていながら、それを行なっているだけでなく、それを行なう者に心から同意しているのです。」分かっているのですが、それを直視しないで、見ないで生きていこうとします。外のところに、安きを得ようとしているのです。

2A シオンに据えられた石 16

しかし、私たちが安きを得られるところがあります。それが、シオンに据えられた石です。16節にある約束です。「見よ。わたしはシオンに一つの石を礎として据える。」とあります。これはユダの人々によっては、エルサレムにある神殿の要石、礎石のことを指していました。あるいは隅石とも訳されています。なぜなら、建物を建てる時に、その土台の角になっているところの石が、建物全体を支えているからです。エルサレムに行くと、アーチ形の遺跡が残っています。石をアーチ状に重ねて門や廊下の天井を作ったものが残っています。その驚くことは、石が重ね合わされているだけなのに、落ちてこないことです。石と石の間に接着させるようなことはしていません。けれども、それを一気に崩すこともできます。それは真ん中にある、アーチ状の一番上にある石を抜いてしまうことです。そうすると、一気にすべての石が落ちてきます。これも、「要石」と呼びます。

しかしもちろん、主が何度も何度も、イザヤ書の中で、「シオンに礎を築かれた。(14:32)」と言われたのは、その物理的な礎のことではありません。そこに主がおられる、もっと究極的には、そこからメシヤ、キリストが来られるということです。この方こそが、礎の石であり、救い主なのだというメッセージであります。使徒パウロが、ローマ9章33節でこのイザヤの箇所を引用しています。そして、イエス・キリストがこの石であることを教えています。使徒ペテロも、この箇所を第一の手紙

で引用しています(1ペテロ 2:4-6)。目に見える、いろいろな頼れるものがある中で、この方こそが頼れる石、確かで、揺るがない石であります。この方にこそ、自分の体を全て包み、温めてくれる、安眠できる寝床と毛布になってくださいます。

1B 試みを経た石

初めに、「**試みを経た石**」とあります。私たちの主イエスさまは、さまざまな試みを受けられましたが、それでも真価が示されました。あらゆる方面から、いろいろなことをされました。いろいろなことを言われました。そして、私たちが試みに遭う時に、「えっ？こんなことも、主は予め通っておられたのですか？」と驚くほど、全ての弱さをその肉体において担っておられました。

御霊に導かれて、四十日間の断食の後に、悪魔が誘惑したことは有名です。肉の欲に訴えられた、目の欲があった、それから高ぶりも試されました。誘惑を受ける三つの分野が試されました。そして、いかがでしょうか、イエス様を信じて、それで近くにいる人にこのすばらしい知らせを伝えたいと思って伝えたら、全く言うことを聞いてくれません。信仰をもって知り合いの人がイエス様を信じたけれども、目の前にいる自分の夫や妻、子供が信じません。しかし、イエス様は、「預言者は故郷では敬われない。」と言われて、あのイエス様がナザレの人々の不信仰によって、わずかな奇蹟しか行えなかったのです。

自分の周りの人が、自分の見た目ですらいつも判断している。あれこれ言ってきて、もう疲れてしまった！イエス様がユダヤ人の宗教指導者にこう言われました。「うわべでさばかないで、正しいさばきをしなさい。(ヨハネ 7:24)」イエス様はいつもうわべで裁かれていました。この頃、忙しくて、することが多くで、眠る時間も少ないでしょうか？自分の寝ている時でさえ、何か落ち着かない。ああ、どうしようか？主よ！と叫んでいたら、実は主ご自身も同じ悩みを持っておられました。「狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子には枕するところもありません。(ルカ 9:58)」

そして、自分が子育てに失敗した。どうして、一生懸命やったのに、うまくいかなかったのか？その時は、イエス様が一生懸命育てた弟子たちのことを考えてください。イスカリオテのユダを選ばれたのはイエス様です。自分が病の中で痛みが激しくなっていますか？主ご自身が病を担われた方です。イザヤが預言しました、「イザヤ 53:4 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。」そしてご自分が中傷をされたことがありますか？罵られたことがありますか？もちろん、主ご自身の十字架を見れば、主がそこで全ての苦しみを担ってくださいました。

ですから「**試みを経た石**」に、寄り頼むのです。主が共におられて、そのような否定的な経験、感情、思いとも全てに付き合ってください、寄り添ってくださいます。その中で私たちは、さらにキリストのお姿に感謝し、この方にいっしょにいたいと願い、またキリストが内に働いてくださり、自分ではできなかったことを、できるようにしてくださいます。これが、ヤコブが手紙の冒頭で話したことで

す。「ヤコブ 1:2-4 私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。信仰がためされると忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。」

2B 尊い石

そして、「**尊い**かしら石」であるとあります。これはもうお分かりでしょう、礎石があるからこそ全体の建物が成り立っています。要石があるからこそ、アーチ状の橋の石も落ちないで済んでいます。自分の周りで、どんな出来事が起こっても、洪水のような出来事が起こっても、それは宝石よりも高価なものとなっています。「1ペテロ 1:7 信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。」今、テレビで視聴率がとても高いドラマが、「下町ロケット」ですね。日本の宇宙開発のロケット打ち上げで最も大事な部分は、エンジンのバルブだという話で、研究者であった下町の町工場の社長が、何年もかけて試験を繰り返して、それに耐え抜いた品質のバルブを作った、ということですね。バルブ自体は、手で収まるような小さい部品ですが、それがあのロケット全体を支えているのですから、いかに大事なものであるかは言うまでもありません。

そして、その尊い石があって、私たちの個人的な信仰だけでなく、神の家が建てられていることを、使徒ペテロは教えました。「1ペテロ 2:4-6 主のもとに来なさい。主は、人には捨てられたが、神の目には、選ばれた、尊い、生ける石です。あなたがたも生ける石として、霊の家に築き上げられなさい。そして、聖なる祭司として、イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい。なぜなら、聖書にこうあるからです。「見よ。わたしはシオンに、選ばれた石、尊い礎石を置く。彼に信頼する者は、決して失望させられることがない。」キリストが建ててくださいます。私が建てるのでもなく、皆さんが建てるのでもありません。私たちがキリストの内に建て上げられることによって、キリストが建ててくださいます。

この方こそが尊い石だとみなすことによって、建て上げられていきます。ソロモンの箴言に、「知恵は真珠よりも尊く、あなたのどんなものも、これとは比べられない。(3:15)」とあります。知恵が、真珠のような宝石よりも尊いということですが、キリストの知恵はどこに示されるのでしょうか？「1コリント 1:23-24 しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かですが、しかし、ユダヤ人であってもギリシヤ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです。」私たちは、しばしば、「これだけやっていて、本当に良いのだろうか？」と思う時があります。キリストの中に生きることだけ、です。それは世の知恵と異なります。信仰によって、今、何が起きているのか分からないけれども、この方により頼ります。愚かに見えるのです。けれども、頑固にキリストにあって愚かに生きていきます。そうすれば、キリストが建て上げてくださいます。神の家を建て上げてくださいます。

3B 堅固な石

そして、「**堅く据えられた礎**」とあります。一見、愚かなように見えます。この世に影響を与えていないように見えます。むしろ、失敗しているように見えるでしょう。「何か起こっているな？」と少し興味は持ってくれるかもしれませんが、基本的に無関心です。世に影響を与えているとは、あまり思えません。

イエス様は十字架に付けられました、大きな騒動のような出来事にはなっていました。けれども、何か起こっていたなと思っていた程度で、ローマ世界で中心の話題では全くなかったでしょう、そして、ユダヤ人社会では、ローマに対して反対すべきという運動が盛り上がっていました。その反対にその体制の中で生き抜いている人々もいました。その中に主イエスがおられ、主はどちらでもありませんでした。ローマにするわけでもなく、けれどもローマに属しているわけでもなく、「神に仕えなさい」と命じられました。そして、この方が甦られ、イエス様に付いていく弟子たちも、ローマに対抗しませんでした。ユダヤ人がローマに反乱を起こした時も、加担せずに、逃げたのです。

ところが、中心的で、大きく動いていたユダヤ教の熱心党は、ユダヤ社会の中で混乱と分裂を引き起こしました。ユダヤ人がユダヤ人を殺すこともやっていました。ついに、エルサレムの神殿をローマが破壊、マサダに籠城した者たちも自害しました。キリスト者はどうでしょうか？ただ静かに主に仕えていました。迫害も受けました。けれども、なぜか広がっていきました。そして、ついにローマの皇帝コンスタンチヌスがキリスト教徒になったのです。「**堅く据えられた礎**」です。私たちの生活の中で、あまりにも地味で本当にこれを行なっているのか？と思われることがあるかもしれません。けれども、それはキリストに従う道です。主が何もされていないようで、多くのことを成し遂げられました。私たちもそうです。

騒ぎの中にいれば、その騒ぎの中で大切なものを失います。「**これを信じる者は、あわてることがない。**」と主は言われました。アッシリヤが攻めてきたときに、「これではいけない、これこれをしなればいけない。」として、自分たちを守ろうとします。けれども、それは恐れの上返しでしかありません。あるいは、このままではいけないという焦りがあって、それで何かをしています。意外に、一生懸命やっていて、これはすばらしいと思われる働きが、その動機が実は世の中と全く変わらないことをしていることがあるのです。ある平和研究をしている姉妹が、しきりにこう言っていました。「何もしない、主を待つ。」と。何もしないことが、いかにしんどい作業であるか。なぜなら、それは主を信頼する立場であり、他の不安や恐れ、何かの感情に捕われるから、何かをしなればいけないと思ってしまうのです。

3A つまづきの石

これだけ、主が尊い石なのですが、そうではない人々たちにとっては、どうなのか？使徒ペテロが第一の手紙で続けてこう話しています。「2:7-8 したがって、より頼んでいるあなたがたには尊いものですが、より頼んでいない人々にとっては、「家を建てる者たちが捨てた石、それが礎の石とな

った。」のであって、「つまずきの石、妨げの岩。」なのです。彼らがつまづくのは、みことばに従わないからですが、またそうなるように定められていたのです。」

1B 見捨てられた石

イエス様は、見捨てられました。神の家を建てるべき人々によって捨てられました。なぜ彼らは、礎石であるはずのイエス様を捨ててしまったのでしょうか？十字架に付けられたキリストは、自分自身が罪人であることを認めなければいけないことを教えます。自分のあり方が罪深かった、誤っていたことを素直に認めなければいけません。それが、つまずかせるのです。自分の中に、「これだけは手放したくない、これがあるから心地よいのだ。」という領域が心にあります。寝床と毛布があるのです。これを手放したくないのです。それさえも捨てて、「私は罪人です。」と認めなければいけないのです。もし、それをしなければイエスはどんなに良い方であるか宣伝されても、自分の心の中で見捨ててしまいます。

見捨てることはなくても、つまずいて離れてしまうこともあります。弟子たちでさえ、イエス様を離れていった人たちがいました。イエス様が、「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲むならば、永遠の命を持つ」ということを言われたら、こんなこと聞いてられないといって弟子たちが離れました。主が甦られた時も、エルサレムから離れて、エマオに向かった弟子二人がいました。彼らは、これは自分の信じていたイエスではないと思って離れてしまいそうになったのです。私たちも、「こんなはずではなかったのに。」と言うことで、心が離れてしまうことがあります。自分の期待通りになっても、それでも主が生きて働いておられると見る必要があります。

2B 砕く石

そして最後に、この石はついに、国々を打ち砕く石となったださることを思い出してほしいです。バビロンの王ネブカデネザルが見た夢が、人の像でした。頭が金、胸と両腕は銀、下腹と太ももは青銅、脚は鉄、そして足と足の指が粘土と鉄の混じった状態です。そして、「一つの石が、人手によらずに切り出され、その像の鉄と粘土の足を打ち、これらを打ち砕きました。(2:34)」とあります。これらの金属は、バビロンからペルシヤ、ペルシヤからギリシヤ、そしてギリシヤからローマです。それから粘土と鉄のところは、ローマの影響が続いて、それから終わりの日に出てくるローマ復興の世界があります。そして最後に、キリストが来られてこの国を粉々に砕かれます。

つまり、どういうことか？見捨てられた石が礎の石となりました。神の家が建てられています。それだけでなく、この地道な道、地味な道、愚かなように見える道、これらがついには、神の国を受け継ぐようにして下さる、ということです。キリストの弱さは、この世の強い者たちを打ち砕く力を持っておられたのです。私たちも同じで、キリストにあって弱くされていること、これが最も強い者たちを踏みつけるほどの力になるのです。